

国内における類似事例の動向

日本国内においても生物多様性オフセットや里山バンキングに繋がる動きが散見され始めている。異なる主体間の地域連携を進めることでこれらの実現性が出てくる。以下はその抜粋である。

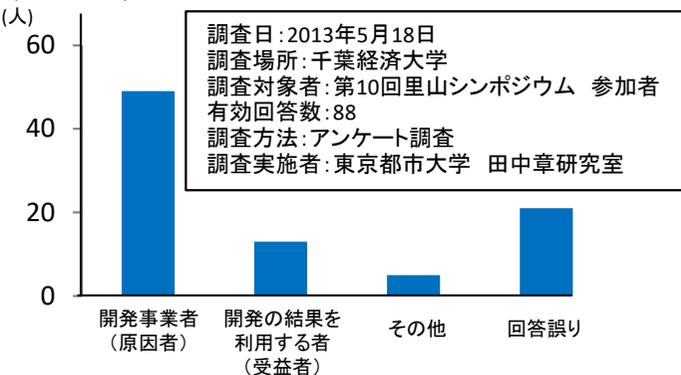
- ✓ 企業のCSR活動報告書に散見され始めた「ノーネットロス」の概念
- ✓ HEPをはじめとしていくつかの生態系の定量評価手法が日本国内に存在
- ✓ 少なくとも5都県2市の環境影響評価条例で確認された明確な環境保全措置の定義
- ✓ 「返子市の良好な都市環境を作る条例」(2009)等で確認されたノーネットロスに準じる定量的保全目標
- ✓ 愛知県で始まったあいちミティゲーションに基づく里山バンキング手法の検討
- ✓ 生物多様性地域連携促進法(2010)に見られる地域連携保全支援センターの役割



図: 地域連携保全支援センターの役割
出典: 環境省 生物多様性地域連携促進法のあらまし

千葉市(対象地)における汚染者負担の原則を求める声

開発事業に伴う自然への影響は誰によって対策されるべきか?
(単一回答)



お問い合わせ

東京都市大学環境学部環境創生学科
田中章(ランドスケープ・エコシステムズ)研究室



〒224-8551
神奈川県横浜市都筑区牛久保西3-3-1
3号館6階09号室(3609号室)
Tel: 045-910-2928 Fax: 045-910-2929
http://www.yc.tcu.ac.jp/~tanaka-semi/
担当: 川村昂史
landscape.ecosystems@gmail.com

研究室へのアクセス



- 最寄り駅は横浜市営地下鉄中川駅です。
(横浜市営地下鉄はJR横浜駅又は田園都市線あざみ野駅乗り換え)
- 本研究室のある環境学部は中川駅から徒歩8分。
- 3号館東側の出入り口、およびエレベータをご利用ください。
- 6Fでエレベータを降りて右側が本研究室(3609号室)です。

東京都市大学環境学部について

環境分野に特化した「環境学部」では、文系・理系の枠を越えた実践的な教育・研究を通じ、環境問題の解決に貢献できる人材の育成に努めます。「環境の世紀」と呼ばれる21世紀、地球温暖化や生物多様性保全に代表される地球規模の問題から、人々の生活に直接関わるエネルギーの確保や水質汚濁の解消まで、解決すべき課題は多岐にわたっています。環境学部では「環境創生学科」と「環境マネジメント学科」の2学科を設置。経済活動に伴い変化する環境や生態系に関する知識と、問題解決に必要な実行力を持つ人材の輩出を目指します。

Ver.2017.08.18

持続可能な里山管理と
新しい生物多様性保全の仕組み

里山バンキング

全世界で主流化する
“生物多様性オフセット”を日本で!

世界約50カ国以上で、“生物多様性オフセット”という制度が導入されています。これは、開発行為で消失した自然を別の場所に復元、創造、維持し、当該地域の自然の消失をできる限り緩和するものです。カーボンオフセットの生物多様性版だと考えるとイメージしやすいでしょう。日本ではまだ導入されていませんが、各方面で導入の議論が進んでいます。

東京都市大学田中章研究室では、およそ20年間この制度の研究を行い、知見を集めてきました。そこで、日本版の生物多様性オフセットの手法として「里山バンキング」を提案します。

千葉県千葉市で
実証実験を行っています!!

里山バンキングにご賛同・ご協力いただける
パートナー様を募集しています!

~こんなことで、お困りではありませんか?~

- > 生物多様性保全活動をしたいけど、方法を検討中...
- > 生物多様性保全活動の成果を、定量的に表現したい...
- > 所有する塩漬け土地、耕作放棄地を有効活用したい...
- > 里地・里山の維持管理の負担を何とかしたい...
- > 生物資源を生かした地域活性化・雇用創出がしたい...
- > 生物多様性に配慮した環境保全型の開発をしたい...

どうぞお気軽にお問い合わせ下さい



東京都市大学環境学部環境創生学科
田中章(ランドスケープ・エコシステムズ)研究室



里山バンキングに関するキーワード

●生物多様性の危機の構造

我が国の生物多様性の危機の構造は、人間活動や開発による第1の危機、自然に対する働きかけの縮小による第2の危機、外来種問題、気候変動と続く。里山バンキングは、第1の危機と第2の危機両方を同時に解決することを期待できる手法である。

●代償ミティゲーション(生物多様性オフセット)

代償ミティゲーション(生物多様性オフセット)とは、開発などの人間活動によって、自然環境の空間的消失が避けられない時、事業者の責任で、消失する自然と同様の自然環境を近隣に復元、創造、維持することで、その地域で保全すべき生態系の「ノーネットロス」を実現させるための方策である。「回避」「最小化」ミティゲーションを充分に行った後にさらに残る影響にのみ適用される。

●ミティゲーション・バンキング(生物多様性バンキング)

ミティゲーション・バンキング(生物多様性バンキング)とは、それまで個別の事業対応で行っていた「代償ミティゲーション」をまとめて第三者(バンカー)が行う仕組みである。まとまった広い土地で自然復元、創造、維持管理を行ったバンカーは、代償ミティゲーションを義務づけられた開発事業者にその効果(クレジット)を市場で売り、利益を得ることができる。

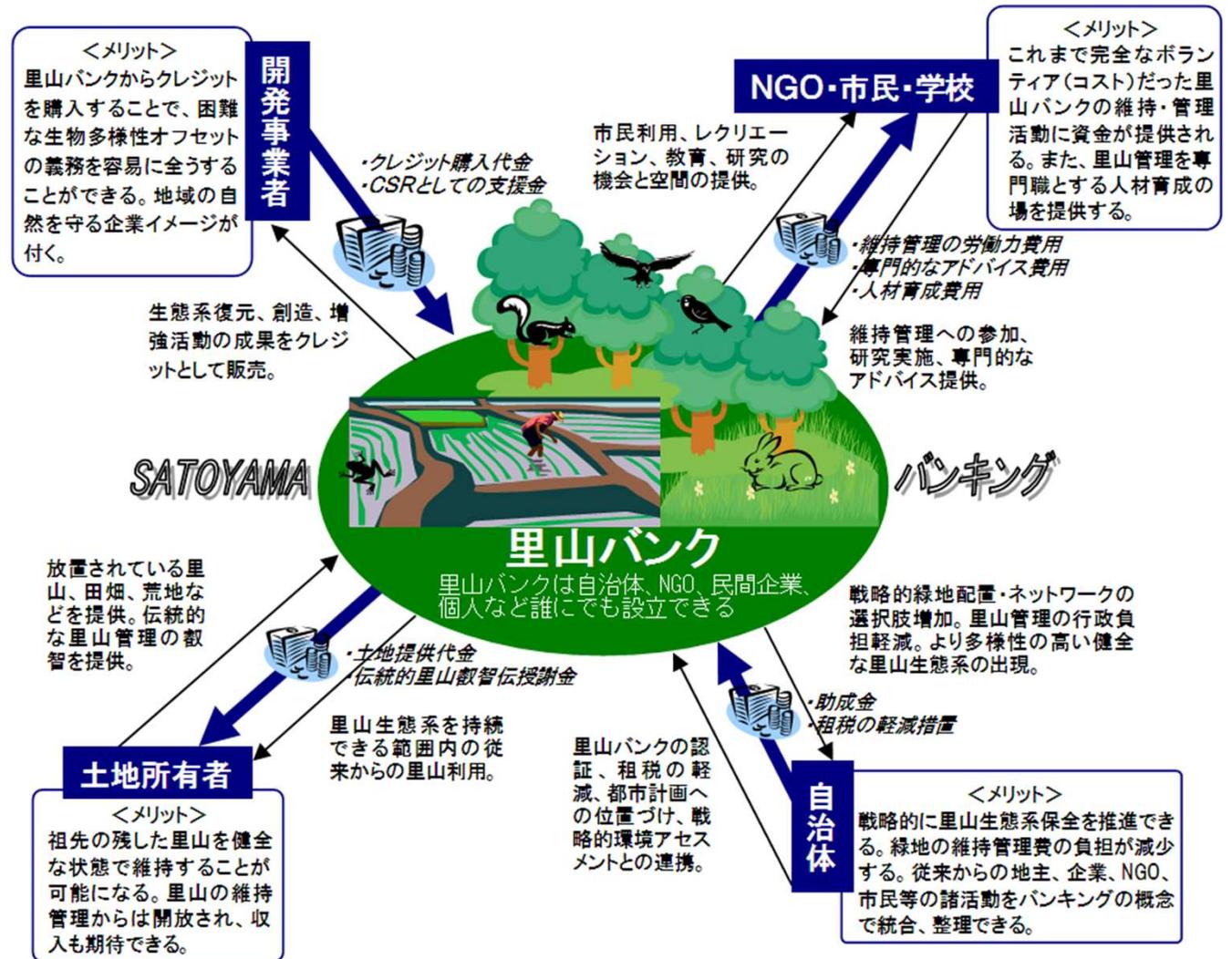
実証実験対象地の概況

千葉県千葉市での実証実験

対象地は「千葉市谷津田の自然の保全施策指針(2003)」において、野生生物の種供給の核となる自然環境保全を目標とする谷津田約6.4haである。水田と斜面林から構成され、以前は放棄水田であった場所に水田を復元し、生態系保全を実施している。



里山バンキングの全体像とシナリオイメージ例



シナリオイメージ

- ①あるエリア(例:流域)の里山の総量についてノーネットロスなどの定量的目標を決める。
- ②そのエリアで開発事業を計画している事業者は、戦略的環境アセスメントを実施する。回避しても最小化しても避けられない影響に対して、PPP(汚染者負担原則)により、事業者に代償ミティゲーション(生物多様性オフセット)が課せられる。
- ③里山バンクの運営主体(バンカー)は比較的広い区域を確保し、専門家の指導を受け、市民やNGOと協力して里山の復元、創造、増強活動を行う。
- ④バンカーによる里山活動などの成果は、自治体などに設置された第三者機関により審査されクレジット(HEPなどを用いて評価)として公認される。
- ⑤バンカーは公認されたクレジットを開発事業者に対して販売し、里山管理や人材育成の資金を調達することができる。
- ⑥開発事業者は代償ミティゲーションの失敗リスクを避けるために、また経済的に有利であるために、里山バンクから必要なクレジットを購入し代償義務を果たす。
- ⑦欧米の生物多様性バンキングと異なり、里山バンクではその野生生物のハビタット機能を損なわないレベルでの利用が認められ、市民やNGOや教育機関等が利用することができる。その際にはBPP(受益者負担原則)により利用の程度に応じて利用者も里山管理を担う。